

平成州紙



おりおりの記

転勤のすゝめ

一般社団法人 投資信託協会
会長

白川 真

『転勤』はサラリーマンに付き物である。特に、証券、金融の業界では頻繁に行われる。私の中では自宅の転居を伴う異動だけを『転勤』と定義している。一般的に、『転勤』という言葉は、あまり良いイメージを持たれていない。多くの場合、家族は喜ばない。私も証券会社勤務時代に札幌に5年間、京都に6年間と2度の地方勤務を経験した。どちらも家族と一緒に移り住んだ。各々東京への戻りがあったので計4回の転勤した事になる。特に多い方ではない。

入社9年目にして初めて命じられた転勤が札幌支店であった。辞令を受けた後、内心やや気落ちしながら妻に告げると、意外にも『バンザイ！スキーがいっぱい出来るね！』と明るい言葉が返ってきた。私を励ます意図があったのかもしれないが、とにかくこの一言で気が楽になった。結果的に、札幌勤務の5年間は公私ともに充実したものだ。時はまさにバブル景気突入と崩壊の時代。赴任した時、2万円だった日経平均株価は約3年後に3万8,957円のピークを付け、私が札幌を離れる時にはまた2万円近辺にまで下がっていた。仕事は文字どおり7-11（セブンイレブン）である。ただ、その内支店での業務は7-9ぐらいで、あとは『すすきの』での残業に励んだ。休日になると冬はスキー三昧、他の季節はゴルフ、テニス、道内旅行と極めて忙しい。当時のマーケット環境

からして、多くのお客様にご迷惑をお掛けしたはずだが、最後には皆別れを惜しんで下さった。

その後4年間の本社勤務を経

て、次は京都支店への転勤となった。女子社員から『白川次長、また飛ばされちゃったのですか』と言われた時にはさすがに呆れたが、これが世間の抱く『転勤』のイメージであろう。紙面の都合上多くは書けないが、京都は各証券、金融機関が力を注いでおり、仕事上の競争も厳しかったが、ここでも公私ともに貴重かつ、思い出深い経験をさせてもらったと感謝している。

確かに、『転勤』は本人にも家族にも重い負荷が掛かる。まして海外であればなおさらであろう。しかしこういう問題を家族と一緒に乗り越えて行くことにも大きな価値があると思う。また異なる環境での仕事や暮らしは、自身を成長させる絶好のチャンスでもある。若い社会人の方々が『転勤』の機会に直面した場合には、是非これを前向きに捉え、ご家族と協力し合い、人生の貴重な1ページを描いてもらいたい。

